

カイサリアに拘束されてから 2 年以上が経ち、パウロはいよいよローマに向かう。本日の 27 章は、護送されていくパウロの旅のうち、マルタ島に打ち上げられるまでの船旅を記録している。

使徒言行録によると、パウロは恐らくこれまで 22 回ほど航海をしている。ルカは、この 22 回ほどの船旅をただどこからどこまで行ったとだけ書いているが、パウロ自身がコリントの信徒への手紙 2 の 11 章 25 節で、「難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました」。そして 26 節では「海上の難」にも遭った、と言っている。ルカは、このローマへの最後の大航海で、これまで遭ったさまざまな難船、難破、事故を、その代表例としてここに詳しく書き残すことにしたのだと考えられる。

1 - 2 節。出港の有様が描かれている。

「皇帝直属部隊」とは、今まで登場していたエルサレムの守備隊とかカイサリアの総督のところにいた部隊とは違って、ここに記されているように、囚人をローマに護送するとか、あるいはある地域の産物を都に送るとか、そういうことを管理する部隊であったと思われる。

ここから出てくる地名に関しては、聖書の後ろにある聖書地図「9 パウロのローマへの旅」を参照。「アドラミディオン」は、トルキエ半島の北西にある港町。20 章 6 節の「トロアス」からすると南東 70 キロほどにある。「マケドニア人アリスタルコ」は、20 章 4 節ではパウロの同行者。1 節に「わたしたちが」とあるので、著者のルカを含め、パウロの伝道に同行していた数人が一緒にローマまで行ったことが分かる。

3 - 6 節。「リキア州のミラ」で乗り替えるというところまでのこと。

「リキア州」は地図には書いてないが、「パンフィリア州」の西隣にある州で、「ミラ」はその州都である。エジプトのアレクサンドリアの麦をイタリアに運ぶ貿易の中継地として栄えた。紀元 4 世紀、コンスタンティヌス皇帝時代のこの町の監督がニコラオス、いわゆるサンタ・クロースである。

7 - 12 節。「クレタ」の「良い港」と言われるところまでのこと。

「クニドス」は、トルキエの南西部からエーゲ海に 65 キロほど突き出しているところにある港町。現在の「コス島」の南東に位置する半島。「良い港」は、クレタ島の一番南にある港。夏の安全停泊には良い港とされていた。「ラサヤ」は「良い港」の東約 8 キロにある。

9 節の「断食日」は、レビ記 23 章 27 節に出てくるユダヤの暦でいうと第七の月の 10 日、贖罪日のこと。これを太陽暦に直すと、紀元 59 年 (27 章の背景年度)

の贖罪日は10月5日だそう。地中海では9月15日から航海は危険とされ、11月11日から翌年3月10日までは航海は閉鎖されることになっていたよう。それで既に10月5日の断食日は過ぎていてもう危険、という状態になっていた。

13－38節。漂流の記事。

「エウラキロン」。北東からの風。標高2,456メートルの最高峰をはじめ2000メートルを超える山々が島の中部にある。そこから「吹き降ろし」して暴風。「カウダという小島」はクレタ島の南約37キロにある現在のガヴドス島。「シルティスの浅瀬」は、アフリカ北岸、現在のリビア周辺。この地域は砂州と浅瀬により難破しやすい海域として恐れられていた。「海錨」は、シーアンカーとも呼ばれ、海水の抵抗を利用して船の流速を減速したりする操船具。

20節の「幾日もの間、太陽も星も見えず」だったということは、天体観測ができないので、船の位置を測量することもできなかったということ。だから「ついに助かる望みは全く消え失せようとした」。

このとき、パウロは一種の預言のような言葉を語る(21－26節)

「わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです」(26節)というのが、「船は失うが」「だれ一人として命を失う者はない」(22節)ということの実現される形。

「十四日目」(27節)は、おそらく「良い港」を出港してからの日数。「アドリア海」は、現在はイタリア半島とバルカン半島の間の細長い海を指すが、聖書時代はもっと南の方、クレタ島やシチリア島までを含んでいたよう。「1オルギア」は約1.85メートル。

39－44節。船が難破してみんなが上陸するという記事。

「兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計った」(42節)。理由は責任を問われないうため。「全員が無事に上陸した」(44節)。全員とは「二百七十六人」(38節)。

この話全体と通して一つ確認したいのは、この遭難が起こったのは、「良い港」よりもフェニクス港に行こうと多くの人考えた結果である。13節の「望み」と訳されている言葉(πρόθεσις、プロセシス)は、「目的」とか「計画」を表す言葉。ところがこの人間の「計画」は、人々全員を危険においやった。

それに対して「全員が無事に上陸した」つまり、救われた、命拾いしたのは、パウロが皇帝の前に出て証しをしなければならないと言われた24節の神の計画によるものだった(23：11節参照)。パウロが「仕え、礼拝している神」(23節)こそが、死に直面し「助かる望みが全く消え失せようとしている」すべての人間を救うことができる。それには神に仕え礼拝するパウロという一人の人の存在があった。救うことこそが神の目的である。神を礼拝する義しい人のゆえに一緒にいる者たちまでもが救い出されるのである。